

OGUSU'S HISTORY

昭和29年～昭和40年

昭和29年〜40年

モーターリゼーションの発展にのり

急激な拡大を見せる成長期のはじまり

時代の代わり目を見きわめ タイミングよく事業を転換

昭和20年代も後半に入ると、戦争の痛手から立ち直り、遠州自慢のやらまいか精神を發揮した多くのオートバイメーカーが芽を出しはじめた。当社の近辺では、可美村の鈴木式織機株式会社（のちに鈴木自動車工業㈱、現スズキ㈱）が、昭和28年に60CCの原付自転車「ダイヤモンドフリー号」を発表。これに続き、昭和29年には90CCの「コレダCO型」が発表された。

当社と鈴木自動車との取引は、距離的に近かったことがメリットのひとつだったが、生産の中心が織機から自動車へと移りつつあった鈴木自動車側が、優れた加工技術が必要としていたことも影響していた。このことは鈴木自動車工業70年史における以下の記述から推測される。

生産技術の革新

……一九五八（昭和33）年ごろから、生産現場では二輪車、四輪車の生産が中心となり、それまでの織機部品の製造にはなかつた加工技術が必要とするようになった。増大する生産量を消化するために、ある部品は熱処理加工や研削加工を必要とし、ある部品はそのための専用機がなければどうにもならなかつた。格段の技術革新が必要であつた。

（鈴木自動車工業70年史より）

昭和28年、当社は鈴木自動車の協力工場となり、翌29年には「コレダ125型」の試作工場となってフォークギヤシフトを生産。30年には軽四輪車のパイオニアと呼ばれる2サイクル360CCの「スライト」の部品試作を全面的に引き受けて、自動車部品、軽四輪部品の専門工場となった。



スズキ初の完成車「コレダCO型」をマイナーチェンジした「コレダ125ST1型」（昭和30年発売）。当社は昭和29年にコレダ125型の試作工場となっている。



日本で初めてFF（フロントエンジン・フロントドライブ）を採用した軽四輪車「スライト」。その商品化には、当社の技術も貢献した。

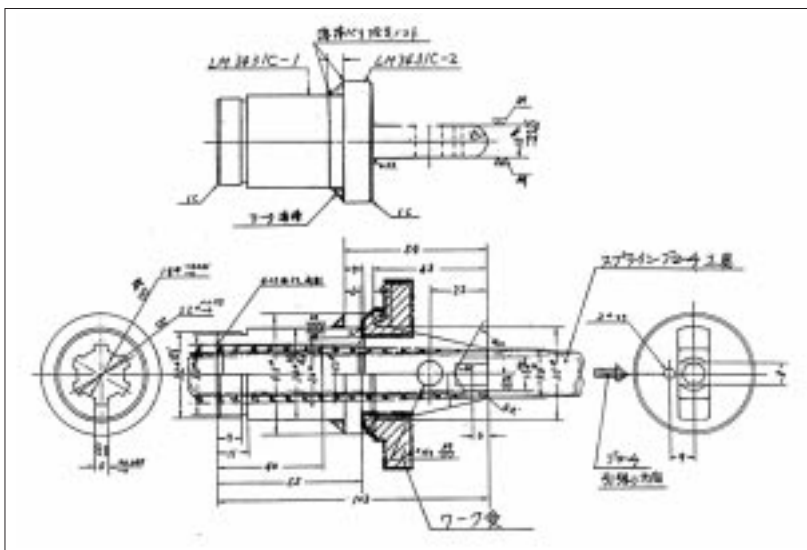
ミッション部品を全廃し、自動車部品へと生産の軸を移した昭和29年、この年の売上げは前年の92%止まりであった。しかし翌30年から猛烈な勢いで回復しはじめ、29年の995万円に対し、30年は1378万円、翌々年の32年には3178万円と3年間で3倍以上の伸びを見せ、ミッションから自動車への決断が実にタイミングよくなされたことがうかがえる。

独自の技術を考案し、 「スズライト」の商品化に 貢献

ミシン部品から自動車部品への移り変わりは、技術面ではどうだっただろうか。振り返って当時の従業員の一人は「ミシン部品と比較すると精度的に楽な感じがした」という感想を述べている。それよりも大変だったのは製造に必要な機械、特に専用機を作ることだった。前の時代に引き続き国産の専用機などない頃で、高額な輸入品には到底手が出なかったのだ。ここでも当社の自前の技術が大いに役立つことになる。

小楠剛一が昭和55年にまとめた「株式会社小楠金属工業所／技術開発の概要集 創業以来の創意工夫・技術開発の歩み」によると、日本で初めてFF（フロントエンジン・フロントドライブ）方式を採用した「スズライト」の商品化にあたり、剛一自ら技術を考案し、実用に供している。その一例を概要集から引用すると

技術開発成果の名称…内径スプライン加工技術
考案年次…昭和34年
スズキTL（スズライト）のFF車のジョイントを作らなければならないというスズキの強い要請に基づき、従来の旋盤を利用した横式ブローチでは、精度も悪く、生産能力もなかったため、縦式のブローチ盤を導入し、以後の内径スプライン加工の基礎をつくり、今日のFF車の先駆とも云えるスズライトの商品化に大いに寄与した。具体的にはドライブシャフトジョイント内径スプライン構造のスズキ設計の要望に対し、この技術をもつて分割構造で対応した。



「株式会社小楠金属工業所／技術開発の概要集」に描かれた内径スプライン加工技術の設計図面。スズライトの製造に役立てた。

このほか、ネジ部浸炭除去技術やカム送りドリルユニット、高能率重切削フライス加工技術など、「スズライト」の商品化に役立つ技術が次々と考え出された。こうした努力のかいあって、鈴木自動車との取引は日増しに増大。昭和20年代の後半から30年代の前半にかけては鈴木自動車以外に、富士工業所（現富士ユニバンス）をはじめ数社と取引があったが、これらは相対的に減っていった。昭和34年、鈴木協力共同組合の発足から2年後のこの年、小楠剛一は同組合の理事に就任。鈴木自動車とのパートナーシップが一層深まってきたことになった。

現在地に全面移転し 本格的な 生産力増強をはかる

昭和35年、旧東海道の南500メートルほどのところに、それと並行して国道1号線が開通。当時、浜の松のみどりを間近に、快適なドライブが楽しめるハイウエー」と形容された新国道の開通に先立ち、この年の早々から当社の新工場建設がスタートした。

新国道沿い篠原中学校南側の敷地は交通の便に恵まれ、環境的にも非常によい場所。ここに1300坪余りの土地を取得し、現在にいたる当社の成長の基盤がかたち作られようとしていた。

新工場の操業までには10カ月ほどを要した。これまでの坪井新田および国方の第二工場から生産能力のすべてを移転し、昭和35年11月から全面操業を開始した。新工場の施設は、機械工場400坪（1320平方メートル）、熱処理工場40坪（132平方メートル）、変電室7・5坪（24・75平方メートル）、固形浸炭炉2基、液体浸炭炉2基、小口自家発電50キロワットなど。ここに、ワシノ外研2台、遠州フライス3台、自家製の専用フライス5台などの新鋭工作機械をはじめ、ドイツ製の自動旋盤や普通旋盤、横・縦フライス盤、円筒研磨盤など100台余りの工作機械を据付けた。

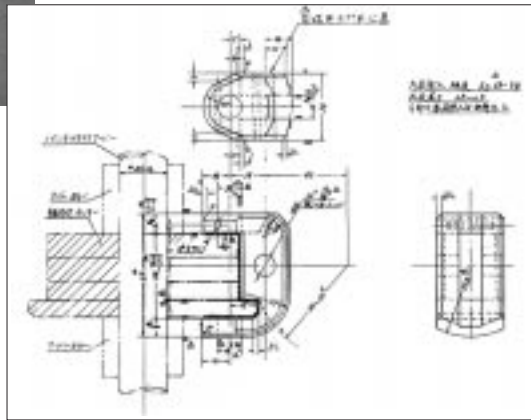
「南側は総ガラス張り、工場内部は実に明るく、機械が整然とならんでいる。採光にも相当の考慮が払われているのである」と当時の地元誌は伝えられている。



昭和35年、現在地に移転した直後の本社工場。
周囲に畑が広がり自然が豊富な環境だった。



ジョイントピースとドライブシャフト。
右は、「株式会社小楠金属工業所/技術
開発の概要集」に描かれた高効率重切
削フライス加工技術の設計図面。



この頃、当社は「ススライト360TL」のジョイントピースの加工を手掛けていたが、当時のフライス盤では十分な切削ができず、技術開発の必要性に迫られていた。そこでドイツ製の中古フライス盤を購入し、市販工具を組み合わせるなどして独自の技術を考案。高精度切削を可能にして鈴木自動車からの要請に応えている。折しも鈴木自動車が増産の要請に力を入れたのは、安定品質の大量生産が望まれていた。そうしたなか、ドイツ製フライス盤を中心としたこの「高効率重切削フライス加工技術」の確立を契機に、当社の技術は飛躍的に進歩していく。

製品ができればいいという 時代に 真面目に品質を追求

「私自身、ご承知のごとく学歴も何もありませんが、誠意をもって物事に当たれば必ずむくわれる時がある……」という言葉を身をもって体験しておりますので、つねづね従業員にも『何事も誠実であれ』をモットーとした日常生活を送るよう話しております」。

昭和36年、地元誌のインタビューに答えて小楠剛一が語った言葉どおり、当社の事業は堅実で真面目一徹のものだった。軽四輪ブームにのった鈴木自動車からの増産要請にも、次々に独自の技術を開拓して対応した。

一例を挙げると、この年考案した「異形部品ネジ転造用ワーク回転保持装置」がある。この装置でネジの軸部を保持することにより、一般的には不可能とされていたターレット旋盤による異形部品のネジ加工を可能にしたのである。加工の精度が飛躍的に向上したばかりでなく、加工時間が5分の1と格段に短くなって、コスト削減にも貢献した。

また昭和38年には、横浜市の旋盤メーカー山田工機と共同で「セミオート内面研削盤」を開発。オートバイのギヤシフトフォークを専門に内研加工するもので、当時一般的に使われていた輸入の内研盤に比べ5分の1程度のコストで製作した。余談ながら、山田工機はこれを機に本格的に内研盤の製作販売にのり出し、のちに中小企業向けの市場を中心にその地位を確立した。

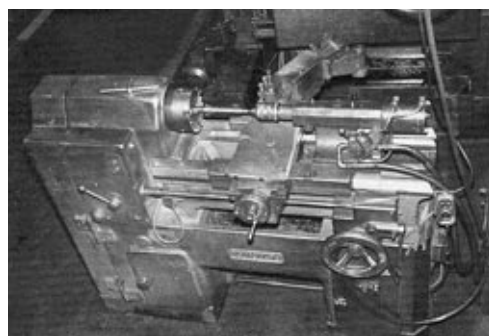
ものができれば売れた時代背景のなかで、当社は品質追求の姿勢を貫き通した。これが厚い信頼の獲得に結び付いたことは言うまでもない。

時流を見きわめ、 積極的な設備投資により 3年間で売上倍増

昭和38年5月、鈴木自動車が「スズライトフロントFEA」を発売。その直後に鈴鹿で行われた第1回日本グランプリ自動車レースに出場して、軽四輪部門で上位を独占した。これがひとつのきっかけとなって「スズライトフロントFE型」は急速にポピュラリティを獲得していった。当社はスズライトの試作時より技術協力を続けており、フロントFEAでもユニバーサルジョイントなど重要保安部品を製造していた。そのため、この車種の人気が高まるにつれて、以前にもまして大きな増産の波が押し寄せてきた。



小型乗用車「スズライトフロント」は人気車種となり、当社も増産対応に追われた。



普通旋盤に倣い装置を取り付け、加工を行った(昭和39年~42年頃)。その後、自動倣い旋盤を導入した。

この頃業界では、テンプレートを使った倣い加工が主流になりはじめた。当社も、普通旋盤に倣い装置をつけて、その効果を目のあたりにしていた。曲面や多段加工が自動旋削できるようになったことで画期的な省人化を果たし、膨らむ一方の生産要請にも見事に対応したのである。

当社の積極的な設備投資と独自路線をゆく技術展開は、当時でも話題になるほどだった。参考までにこの頃の設備投資額を挙げる。

昭和34年末	1373万4000円
昭和35年末	3230万3000円
昭和36年末	4523万2000円
昭和37年末	5358万円
昭和38年末	約7000万円

現在地に工場を全面移転した昭和35年から、わずか3年間で売上高は倍増。6400万円から1億3600万円へと成長ぶりは、当時の経済成長率を大幅に上回っていた。翌昭和39年、東海道新幹線が開通し東京オリンピックが開かれた年には、新たに㈱共栄社との取引がスタート。当社の成長はさらに続いていくのである。

品物を作るより人づくり 従業員を大切にする経営を 実践

当社の経営方針は従業員第一で終始一貫している。「従業員あつての会社であり、会社の伸張は従業員の努力、精進によるものだ」という創業の精神は、現在までも受け継がれているものである。高度成長期に突入した昭和30年代の後半からは、慢性的な人不足の時代が続き、世間一般の風潮として従業員の定着率は低かった。そのなかで当社は永年勤続の社員が多く、特異な存在であったと言える。工場内の社員食堂には、「永年勤続社員表彰」を授与する社員の一覧がはってあり、創業以来の永年勤続者の名前も数多くあつた。

この背景には、働きやすい職場づくりに向けたさまざまな配慮があつた。たとえば昭和35年に全面移転した工場は、当時では珍しく冷房の仕組みを取り入れていた。夏の暑いときには地下水を汲み上げてスレート葺きの屋根に流したのだ。また工場内の食堂には、テコラのテーブルと従業員の数だけ椅子がそろえられ、正面には17インチのテレビが据付けられていた。



工場内に設けた食堂。従業員の健康を考え、バランスのとれた食事を提供していた。

創立20周年を前に

楠寮竣工

県下の施設と評判を集める

忙しい合間をぬって慰安旅行や運動会なども定期的に開かれた。慰安旅行は昭和28年頃からほぼ毎年行われ、岡崎や熱海、箱根など近隣の観光地で楽しい時を過ごした。はでなイベントはなかったが、従業員の勤勉な勤務態度に報いるために心が配られていたのである。



福利厚生面には特に力を入れた。
毎年恒例の社員旅行や運動会などには多くの従業員が参加した。



多くの社員が参加したソフトボール大会。
(前浜にて)

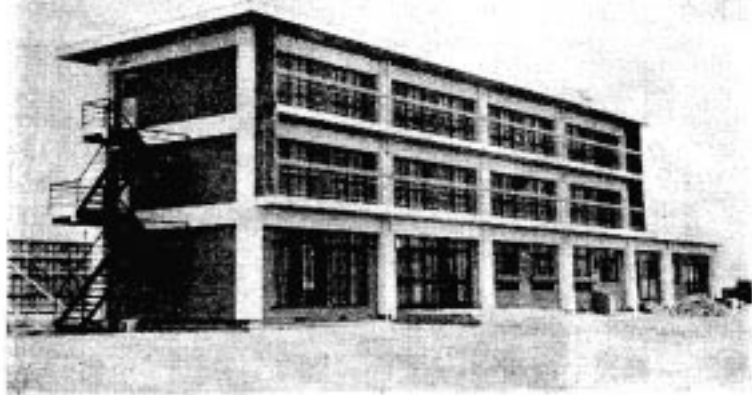


昭和40年、翌年の創業20周年を前に、念願の独身寮が竣工。遠く九州方面からも従業員を募集していた時期で、鉄筋コンクリート造り3階建ての「楠寮」は、さまざまな出身地の若者でにぎわった。総建築面積628・36平方メートル、1階は和室の集会室、洋風の会議室、浴室などがあり、数台の電気洗濯機が完備された洗濯ルームは、楠寮の自慢だった。2階、3階は寮室で全部で18室、当初50名あまりを収容した。前庭にはテニスコートもあつた。楠寮の設備は当時県下一と言われ、通り掛かりに写真を撮っていく人もいたという。



昭和40年に完成した独身寮「楠寮」。
当時としては豪華なつくりで評判を集めた。
左は寮内の集会室。
楠寮は平成2年に取り壊され、現在は南工場が建てられている。





県下一の設備をもつ
独身社員宿舎施設

「楠寮」

↑楠寮全景

創業20周年を迎えた 株式会社小楠金属工業所 浜松市篠原町の

浜松市篠原町の株式会社小楠金属工業所にこのほど独身社員用の宿舎施設として建てられた施設をも「楠寮」が完成、業界の注目を集めている。浜松市の中心から西へ一歩を西進すると篠原町境内の新園地南側に下りの松林を有取に建てられている近代的なビルがある。その鉄筋コンクリート造り二階建のモダンな建物が「楠寮」である。小楠金属工業所が創業二十周年を記念して五十五周年を記念して建てたものだが、あくまでもその建設意図は従業員の福祉増進の向上に重点を置く小楠第一社長の経営理念に死している。小楠社長は「楠寮を通じて将来社会を背負って立つ中堅幹部を育成してゆきたい」と意欲のはとを語っている。だから楠寮で生活する若い社員に対する研修は実にきびしく見方によっては学校よりも徹底した教育を行っている。楠寮は小楠金属工業所工場のすぐ南側に建設され三階建のビルの側面にはテニスコートもつくられている。総建築面積は八二八・三六平方計。一階は和風の集客室、洋風の会議室、それに休養室、管理人家、浴室などにあてられており、ゆったりと広く明るい浴室や洗面の電気洗濯機が

完備された設備ルームは楠寮第一階の一つ。十八畳敷きの集客室は主として従業員の手芸、棋楽の場として使用、会議室は研修時の教室や従業員のグループ活動などに利用されている。ポーチを踏んで一枚ガラスのドアを入った玄関ホールは人研直隸日地切の床、廊下はゴムタイル張りで、ちよっと高級なホテルにでも入ったような感じである。二階、三階、は全部寮室になっており、一室は六畳で押入れ下駄箱つき、洋服ダンスや本棚が壁のなかにはめ込まれている。寮室は全部で十八室あり五〇余名の収容力である。ところで小楠金属工業所が創業したのは戦後間もない昭和二十一年三月であった。氏名篠原村岸井（浜松市岸井）に個人経営によるさきやかな工場をもってスタート五年目の昭和二十五年法人に組織替え、昭和三十五年に藤原中学校南側の現在地に社屋工場を移転、新築、鈴木自動車系列工場として今日に職種をみているもので、今では従業員一五〇名を擁している。「人間は感嘆でなくてはならない」とこれが小楠社長の信念であり同社従業員はこの社長の薫陶によって独自の社風を生み出している